

#top

タイトル

○○○○○○○○○
○○○○

.grid-item

あああああ

・AAAA
・BBBB

読む..

いいいいい

・AAAA
・BBBB

読む..

#middle .grid

うううう

・AAAA
・BBBB

読む..

えええええ

・AAAA
・BBBB

読む..

まとめ

○○○○○○○○○
○○○○

#bottom

#content

タイトル

○○○○○○○○○
○○○○

あああああ

.detail

#middle

・AAAA
○○○○○○○○○
○○○○

・BBBB
○○○○○○○○○
○○○○

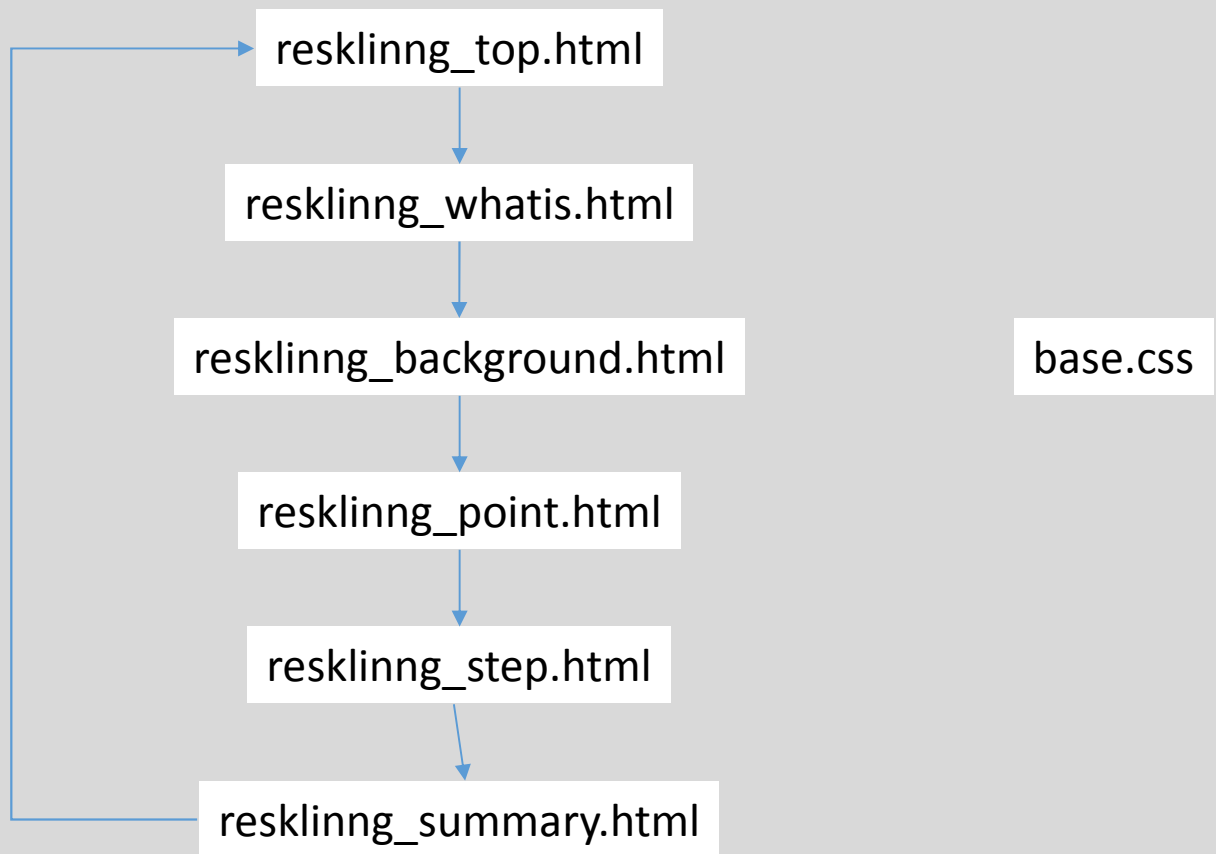
図表

○○○○

○○○○○○○○○
○○○○

[.. 戻る](#)

[続きを読む ..](#)



リスキリングとは？言葉の意味と実施時の注意点を解説

近年ビジネスシーンでよく耳にする「リスキリング」という言葉。経済産業省でもDX推進に絡める形で提唱されている、人材育成の1つの形です。今回は、リスキリングという言葉の概要や類似した教育手法との違い、急速な普及にともなう社会的背景などをご紹介します。リスキリングに取り組む際の注意点やステップについても解説しますので、ぜひご参考にしてください。

リスキリングとは

リスキリングとリカレント教育の違い

リスキリングとOJTの違い

[読む..](#)

リスキリングが急速に広まっている背景

2018～2020年の「リスキリング革命」

DX時代の到来

人手減少を視野に入れた人材育成

[読む..](#)

リスキリングの注意点

リスキリングの対象はIT技術者だけではない

DXプロジェクトを推進するためのリスキリング

従業員のモチベーション管理が重要

[読む..](#)

リスキリングのステップ例

ビジネスパーソンがデジタル人材を目指す場合

レガシーエンジニアがクラウドネイティブ開発を目指す場合

[読む..](#)

まとめ

新卒一括採用・年功序列型の人事制度が長年取り入れられてきた日本では、キャリアアップを目的とした再教育の機会が他国よりも少ないとの調査結果もあります。この状況からDXを早期に実現するには、ビジネスパーソンにもリスキリングなど新たな教育機会を設けることが必要でしょう。

今後は、社員教育へ積極的に投資する企業も増えていくと考えられます。この機会に自社の課題を洗い出し、人手不足の時代に備えて既存の人材をより活かす教育手法の導入を検討してはいかがでしょうか。

リスキリングとは？言葉の意味と実施時の注意点

近年ビジネスシーンでよく耳にする「リスキリング」という言葉。経済産業省でもDX推進に絡める形で提唱されている、人材育成の1つの形です。今回は、リスキリングという言葉の概要や類似した教育手法との違い、急速な普及にともなう社会的背景などを紹介します。リスキリングに取り組む際の注意点やステップについても解説しますので、ぜひご参考にしてください。

リスキリングのステップ例

リスキリングを進めるにあたって、まず必要となるのが目標の設定です。またそれとともに、現状有している知識とスキルの棚卸しを行うことや、新たな習得が必要な知識やスキルを洗い出すことも必ず行いましょう。

ここでは、リスキリングを行う上でのステップの一例を、ケース別にご紹介します。

（例1）ビジネスパーソンがデジタル人材を目指す場合

これまでIT以外のビジネスにあたった従業員がIT、AI（人工知能）、データサイエンスに関する知識・スキルを身につけるケースです。この場合は、現在持っているスキルと新たに必要なスキルのギャップを明らかにしなければなりません。

スキルデータベースなどのツールがあればそれを活用して分析し、一人一人の現状を可視化すると良いでしょう。

その上で、それぞれに習得が必要な内容をはっきりさせておきます。このとき、たとえばIT分野であれば情報処理試験などの資格体系を目標設定に利用すると、ゴールとなるスキルセットが明確になります。AIやデータサイエンスに関するスキルも同様です。

その後、リスキリングのプログラムを作成しそれに基づいて教育を行っていきます。自社でプログラムを作ることができればベストですが、外部のリソースやプラットフォームなどを活用することも検討します。

一定の知識やスキルが身についたら、必ず実務で知識やスキルを活用できる場を与え、簡単な作業から実践的なビジネスへと段階的に拡大していきましょう。リスキリングにおいては、「習って終わり」にしない取り組みが大切です。実験的なプロジェクトやプロトタイピングなど、試行錯誤が可能な取り組みがあると効果を発揮しやすいでしょう。

（例2）レガシーエンジニアがクラウドネイティブ開発を目指す場合

こちらは、もともと従来型の技術環境を対象として一定のITスキルを保有するメンバーに、まったく新しいIT教育を行うリスキリングのケースです。

基本的な教育のステップは、前項でご紹介した手法と同じです。まず、現状あるスキルや知識とこれから必要なもののギャップを明確にし、リスキリングプログラムに基づいて教育を実践します。その上で、身につけた知識やスキルを現場のビジネスに段階的に活用していくという流れです。

クラウドネイティブという考え方のもとでアプリケーション開発を行うために必要となる、おもなITスキルには以下のようなものがあります。

- ・ クラウド基盤やプラットフォームに関する知識やスキル
- ・ クラウドベンダ各社のサービスに関する知識やスキル
- ・ クラウドに適したプログラミングに関する知識やスキル
- ・ クラウドに関わるセキュリティに関する知識やスキル
- ・ マイクロサービスなどのアーキテクチャ設計に関する知識やスキル
- ・ DevOpsやアジャイルに関する知識やスキル
- ・ 開発環境や運用環境に関する知識やスキル
- ・ DockerコンテナやKubernetesに関する知識やスキル など

クラウドネイティブとは、変化するビジネスニーズや環境に対応しやすい、柔軟かつ堅牢なシステムをクラウドで実現するための設計や開発、運用のアプローチのことです。クラウドネイティブの実現には、クラウドが持つ特性を理解した上で、メリットを最大限に活用するための知識やスキルが欠かせません。オンプレミスや従来型のシステム開発で得られた知識やスキルをベースにしながらも、それとは異なる方法論や技術についても通じておく必要があります。さきほどあげた知識やスキルのカテゴリと、現有知識・スキルとのギャップを見極めて、適したリスキリングを行うことが、クラウドネイティブに対応したエンジニアになるために、求められるのです。